

雨が降ったら濡れるだろう。
霜が降りたら冷たかる。
土のしたでは暗かるう。
浮かば波の上、
沈まば波の底、
春の水なら苦はなかる。

URI GAMES

上

人魚沼

うり

人魚沼

(上)

Uri Games



2784865739012



2920193011004

定価：本体1100円

ISDN278-4-865739-01-2

C0193 ¥1100E

大学の夏季休暇中、フィールドワークを兼ねた旅行に来ていた山崎凜・若杉清太郎・菊池由香・高橋雄太は山中で身動きがとれなくなってしまう。そこへ偶然通りかかった近辺の地主、土田幸男に救われ彼の自宅である山中の洋館へと招かれる。館は巨大な沼のほとりに建ち、「人魚沼」と名付けられたその沼にはある伝説が語り継がれていた。家主不在の館に留まることとなった四人は恐ろしい現象に見舞われる。2013年制作のフリーホラーゲームを小説化。

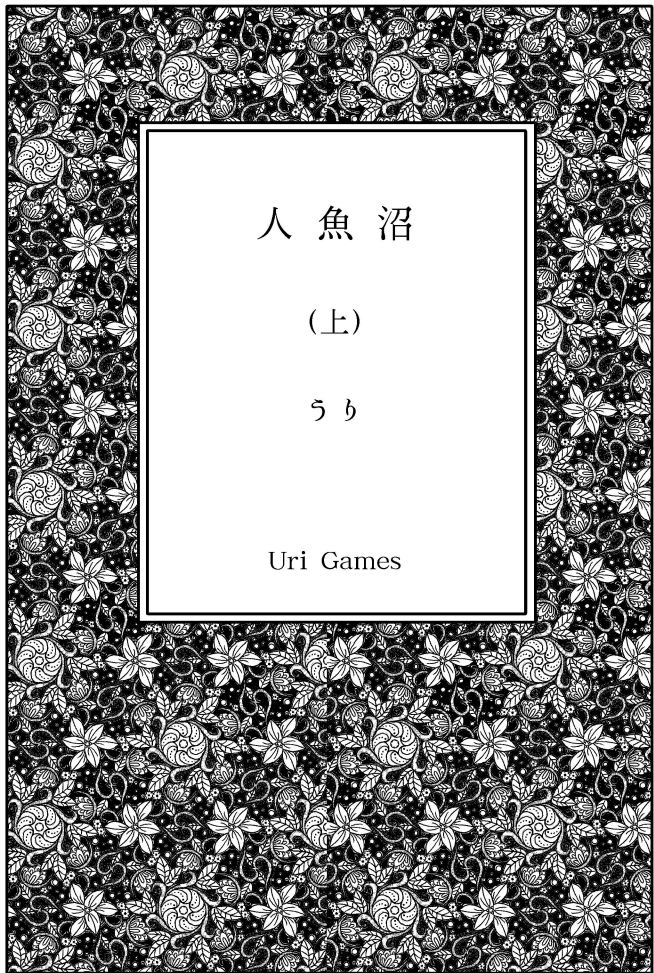
Uri Games

Games

2012/02 INSANITY
2012/03 PARANOIAC
2013/01 The Crooked Man
2013/07 人魚沼
2014/02 The Sand Man
2015/09 The Boogie Man
2017/05 The Hanged Man
2018/07 人魚沼 リメイク版
2019/06 PARANOIAC リメイク版
2020/01 INSANITY リメイク版
2021/09 PEDESTAL

Books

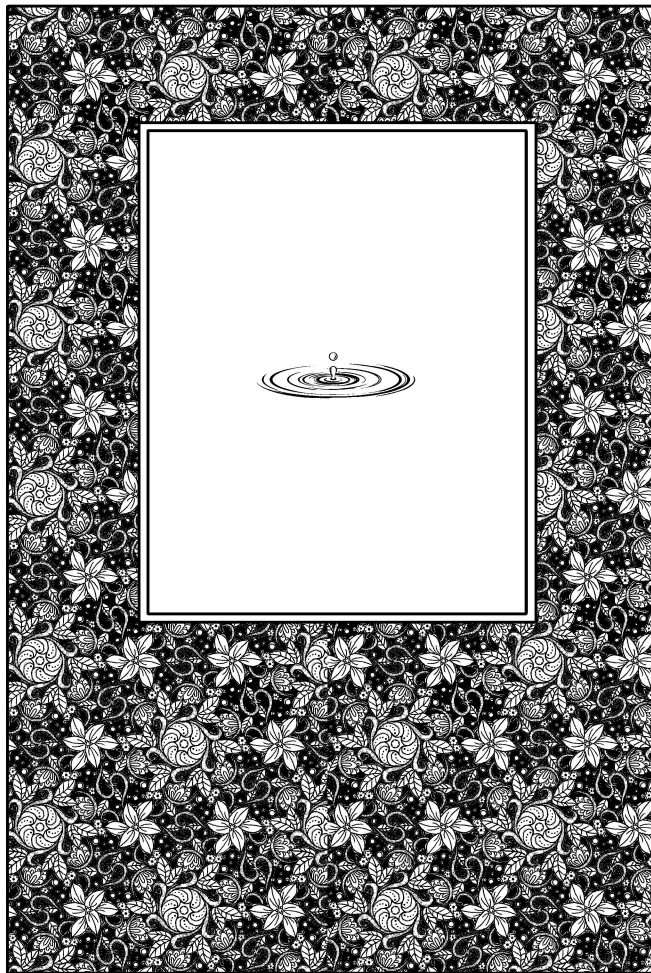
2018/08 人魚沼 設定・考察集
2018/10 Wrecked Two
2019/02 A Cherry in the Beak
2019/06 PARANOIAC
2023/04 Databook of
The Strange Men Series



う
り

人 魚 沼 (上)

Uri Games





人 魚 沼

(上)

う り 作

Uri Games

目次

一	山中にて	5
二	沼の館	18
三	先触れ	49
四	膨張	81
五	搜索	105
六	夜闇の中	172
七	遭遇	211
八	接近	246
九	豹変	290
	土田家間取り	312
	絵画出典・参考文献	314

一、山中にて

——なんだ？

誰かに呼ばれたような感覚に、山崎凜の意識はゆっくりと覚醒した。

薄暗く緑がかった視界には何もない。瞼の裏の暗闇がただ色を変えただけのような景色だった。ならばと耳を澄ましてみるが何の音も聞こえない。聞こえないというよりは耳に何か詰まっているような感じで、そのフィルターを通過したごく小さな地鳴りのようなものだけは感知できていた。時折緑色がぐにやりと歪んで僅かに白んだり小さく丸い気泡らしきものが眼前を上ってはどこかへ消えていく。泡の行方を追って顔を上に向けようとすると首が動かない。それどころか眼球すら動かさない。腕も脚も腰も——意思と動作を取り次ぐことを忘れてしまったかのように動く気配を微塵も見せなかった。

——ここは水の中なのか？

——どうして私はこんなところに

自分がいるのは水中ではないかと思いつるも、ありえないと凜はすぐにその考えを打ち消す。これだけ長い時間水中に留まっていれば必ず襲ってくるはずの息苦しさが全くない

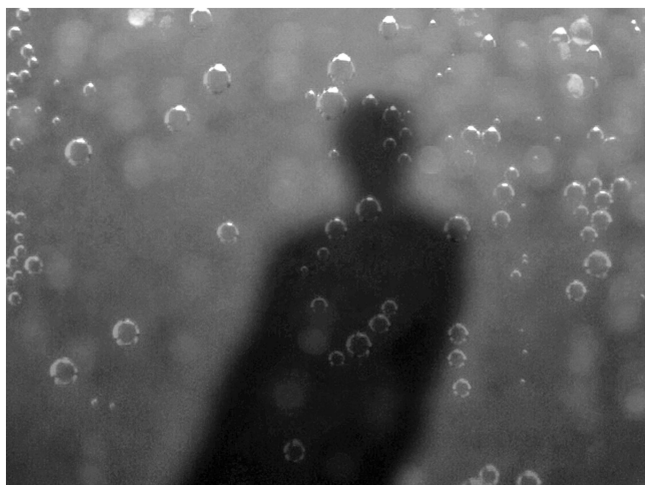
のだから当然だ。彼女の口はぽっかりと開いたままで口内どころか喉の奥にまで水が浸入しんにゅうしている感覚がある。まるで体内の隅々まで水に満たされているかのようだ。それなのにちつとも苦しくない。さらに言えば、息苦しさを感じるところか胸腔きょうくうには心臓の鼓動こどうすら響いていない——そう、全てがありえないことなのだ。

しかし凜はありえない現状げんじょうを解釈しようとも解釈したいとも思わなかった。どうせ何もできないし何もしたくなかった。全身の筋肉と同じく脳も活動を停止したのかも知れない。彼女は無機物むきぶつのようにただそこに在るだけで、どこにも問題などなかったのだ。

ふと、視界の中心が黒く翳かげった。輪郭りんかくの暈ぼけたその影は絶え間なく揺らいで形を変えるため一体何なのか判別はんべつができない。凜は目を凝こらそうとしたが、やはり顔の筋肉はぴくりとも動かなかった。

——誰たれかいる……？

揺れる黒い影が何者かであると気づいた瞬間、硬かたくなった胸の奥に何かがじわりと滲にじんだ気がした。



* * *

「凜、おい、起きろ！」

呆けた意識を揺さぶる耳障りな声に、凜は目を瞑ったまま低く唸った。

ゆっくり目を開けてまず視界に入ったのは車窓に映る彼女自身の顔だ。忙しなく流れていく後景の山道にそぐわずぼんやりと眠たげな表情を浮かべる顔には、好き勝手な方向へうねる金糸雀色の髪が一房かかっている。唇の端から下へと伸びる涎の痕が彼女の端正な顔立ちを台無しにしていた。窓に映る半透明の顔の像は深緑の樹々と乳白色の霧によって絶えず模様を変え、自分の顔なのにずっと眺めていると酔ってしまいそうだと凜は感じた。

「いつまで寝てんだよお前は。とっとと起きろ」

苛立ちを少しも隠そうとしない投げかけに触発されたのか、口端を拭いつつうるせえなあと舌打ち混じりに吐き捨てると、凜は後部座席に自分と並んで座る男——若杉清太郎を横目で睨みつけた。見れば向こうも斜めに分けた浅葱鼠の前髪の下から彼女を睨んでいる。互いの睨睨がぶつかって軋み、ギリリと音を立てそうだった。

「いいじゃねえか、ちよっと寝るくらいよお」

「ちょっとじゃねえだろ。雄太はずっと運転してるんだから氣い遣えよ。ほんと、女子力のかけらもねえ奴だな」

「お前に見せる女子力はねえよ」

毒づきあう金髪の女と銀髪 of 男の剣呑とした空気を、凜、おはよ、という柔らかく軽やかな声が中和した。声の主は助手席に座る菊池由香だ。彼女は前を向いたままバックミラーに映る凜へ語りかけている。椅子の背の向こうに見える濡羽色のボブヘアには天使の輪が艶やかに光っていた。バックミラーに映る由香のくりくりした大きな目と視線が合ったら、凜は苛立ちが少し和らいだような心地になった。

「昼からずっと寝てたけどよく眠れた？」

「ああ、この若ハゲのせいで目覚めは悪いけどよく寝たわ」

「うっせえよ山猿」

凜から顔を背けた清太郎はふと霧深い窓の外に視線をやり、ところで雄太、と口を開く。
「ここ、どこなんだ？ さっきそろそろ高速入るとか言ってたけど、どう見ても山の中だぞ？」



僅かな間を置いて、運転席の高橋雄太がはつと乾いた笑いを零した。

「わりい、俺もどこだかんね！」

「はあ？ ひよつとして迷ったのか？」

「うん。ここがどこなのかさっぱり分からん」

ぎよつとしたように由香が隣の雄太を見つめ、うそ、と小さく呟く。

「山入って近道しようって言うから道分かってるんだと思ってた……」

「ごめんなあ。最初は分かってただけと途中からもーさっぱり。霧もすげえ深いしさ……ははっ」

再び漏れた笑いに雄太の唐茶の髪が揺れる。由香が不安そうなのにもかかわらず能天気な彼の態度に、凜はカチンときて運転席の背を軽く足で小突いた。

「笑い事じゃねえだろこのタコ!! だからカーナビもついてねえお前のボロ車なんかで旅行は嫌だつったんだよ……」

「そう言うなよ、悪かったって。うーん、どうしたもんかな。標識も全然見当たらねえんだよなあ」

やはりお気楽さの消えない雄太に、凜は腹立ちまぎれの強い鼻息を吹いた。

凜、清太郎、由香、雄太は都内の某大学日本史学科の同じゼミに所属する二年生である。彼らは夏季休暇中の課題のフィールドワークと小旅行を兼ねて、とある地方を車で訪れていた。二泊三日で対象の地域の調査を予定どおり終え、現在はその帰り道である。

凜がボロ車と評したグレーのセダンは、雄太が大学進学の際に彼の叔父から乗り潰すまで使ってやってくれと譲り受けたものだ。旅行好きの雄太と知的好奇心旺盛な清太郎はしよっちゅうこの車に乗り込んで他県へB級グルメを食に行ったり、日帰りで温泉をはしごしたり、特に目的もなく海に行ったりと大学生ならではの時間を度外視した旅程でオンボロ車を有効活用している。確かに古い車でカーナビなどついていないが、運転が上手く車の扱いに慣れている雄太と、博識で記憶力がよく大抵の道筋なら苦もなく覚えていられる清太郎にとっては気にするほどのことではないらしい。そもそもカーナビなんて現代ではスマホでいくらでも代替が利く。

ゼミの仲間かつ彼らの親しい友人である凜と由香もこの車の恩恵にあずかることが何度もあった。今回のフィールドワークがいい例である。調査対象の地域が辺鄙な場所なので本来なら新幹線・ローカル線・バスと公共交通機関をフル活用する必要があったのだ。そう考えると雄太の車は労力と費用の節約において十分に貢献している。これで彼の予測どおりに高速に乗れば後は数時間車を走らせるだけで彼らが暮らす東京に辿り着くはず

だった——のだが。

「——あれ？」

雄太が声をあげる前に彼以外の全員が異変に気づいていた。車の速度がだんだんと遅くなりあつという間に徐行じょこうになったかと思うとついには止まってしまったのだ。

「……どうして止まるの？」

由香が訝いぶかしげに雄太の足元に視線を送る。彼女の予想に反し彼の右足はアクセルペダルに乗ったままだ。

「分かんねえ、急に動かなくなつた……。ちと待つて、エンジンかけてみるから」

雄太がキーシリンダーに挿さした鍵を回す。キュルキュルとセルモーターの回転する音が派手に響くが一向にエンジン音は響かず振動もない。何回か鍵を捻ひねった後、おどけた様子で雄太がハンドルから両手をぱつと離れた。お手上げのポーズだ。

「あゝ、だめだこりゃ。完全にイカれたっばいわ」

「おいおい、マジか」

霧深い山道で車が動かなくなる——そんな最悪な状況にもかかわらず男二人は落ち着いていた。なにぶん古い車なので変な音が聞こえてきたり突然止まったりといったトラブル

はこれまでもちよくよくあつたのだ。雄太は慣れた様子で警告灯のチェックやライトが点くかの確認をしているし、清太郎は呆れ顔ではあるものの何やら冷静に思案している。四人の中で不安げなのは由香だけだ。雄太が迷つたと言いつつ出た時からそれは変わらない。そして凜はと言うと——やはり怒っていた。

「ふざけんじゃねえよこのアホ!! ったく……ちよつと外出て車見てみつから、お前ら待ってろ」

凜は怒鳴つた勢いのまま車を降りると後ろ手に強くドアを閉めた。

思った以上に霧は深い。咽せ返りそうな気がして凜は思わず息を止める。八月だと言うのに空気はひんやりと冷たく照葉樹林に挟まれた山道は昼間でも薄暗かった。車内を顧みると雄太と清太郎は何かを相談している。窓から外を窺っている由香と目が合うと彼女は下がり眉のままニコと笑った。釣られて凜も口の端を上げひらひらと手を振って見せる。そして車と正面から向かい合つた。

免許は持っているもののペーパードライバーで車の知識がほとんどない凜がいくら車体を眺めたところで当然何も分かる訳がない。しかしこういう時に黙って大人しくしてられないのが彼女の性分だった。問題が解決できるかどうかは二の次である。とにかく体を動かしてきたいのだ。今は大好きな親友の由香が困っているのだから尚更だ。何が原因で

車が動かないのかは分からないが壊れた機械なんて衝撃を与えてみるに限る、とりあえず蹴ってみるか、しかしそんなことをしたら頭でっかちの清太郎にどやされるだろうな、などと適当な考えを巡らせながら凜は車の周囲をふらふら歩いていた。

ふいに彼女はぴたりと足を止めた。乳色と深緑の繰り出すマーブル模様の視界の隅で何かが動いたような気がしたのだ。車の進行方向の先、濃霧の奥へと目を凝らす。

十数メートル先に誰かが佇んでいるのだと気づいた瞬間、凜の心臓がどくと跳ねた。

「誰か……そこにいんのか？」

咄嗟に霧の向こうへ声をかける。いったん車内に戻ろうとか友人たちに知らせようとかは思いつかないのが凜という浅慮な人間だった。

彼女の呼びかけに反応したのか、霧の向こうの誰かは湿った土を踏みしめながら彼女の方へゆっくり歩み寄ってくる。白い靄に浮かんだ薄い影がだんだんと色濃くなっていき、そして——現れたのは一人の老人だった。

Yシャツの上に季節外れの赤いセーターをまとった白髪頭の男は凜より少し遅れて相手の姿を視認したらしく、驚いた、と低く呟いた。

「こんな山で何してらっしゃるんです？ お嬢さん」

老人の声の調子はとても穏やかなものだった。警戒で強張っていた凜の肩の力がほっと

抜け、そのせいか、なんだじじいかよ、驚かせやがって、と失礼極まりない言葉が転び出る。

「大学のダチと旅行中だったんだけど車が動かなくなっちゃまってさ。立ち往生してんだ」
歩み寄る凜のぶつきらぼうな言葉遣いを気にする素振りも見せず、老人は至って鷹揚に、
そりゃあ困りましたな、と応対する。

「どこか宿泊する当てはあるのですか？」

「いや、ねえ。このまま動かねえなら車で一泊だな……」

それは大変ですね、と返した後老人は少しの間俯いて何かを思案していたようだったが、
すぐに顔を上げると凜の顔を正面から見つめた。

「私の家がすぐ近くなのですが、ぜひいらしてください。夏とはいえ夜は冷えますよ」
突然の申し出に、いいのか？ と凜は目を丸くした。微笑む老人が無言で頷く。

「じゃあちよつとダチと相談してくるぜ！」

笑顔で言い放った凜は、見知らぬ人物と会話する彼女を見守るような視線を送っている
友人たちの元へ駆け出して行った。

「助かりました……ありがとうございます、おじいさん。でもいいんですか？ こんな大
人数で押しかけて」

凜と老人の邂逅から数分後、四人の若者は車を停止したその場に残り、老人に連れられて山中を進んでいた。老人が先導するのは彼らが車を走らせていた山道を横に逸れたけもの道である。道と言っても、初見の人間なら絶対に分け入ることがないような鬱蒼とした森林の中だ。一歩進む度にショートパンツから伸びた脚を草が掠めては露がびたびた濡らすのが凜には気持ち悪かった。自宅はすぐ近くだと老人は言ったが、こうも険しい道なら歩くのが短時間だろうがとんでもない苦行だと内心で舌を鳴らす。疲れて口を開くのも億劫だったのでかろうじて不満を漏らすことはしなかったが。

「なあに、私はここいらの地主でしてね。無駄に広い家を持っておりまので……」

由香の問いかけに笑いながら答える老人は傾斜が多く草木の生い茂る山中を歩いているにもかかわらず全く息が上がっていない。さすがが所有しているだけあって山道に慣れているのだろうか。ふと老人は、おっと、と若者たちを肩越しに顧みた。

「そういえば自己紹介がまだでしたね。私は土田幸男と申します。寂しい老人の一人暮らしですから、お若い方が来てくだされば家も賑わいますよ」

「本当に助かります。明日には車直して出ていきますんで……」

恐縮した様子の清太郎の後ろ姿を訳もなく睨みつけながら、凜はのっしのっしと大股で歩を進めた。